

# 俳壇 読売

## 矢島 渚男 選

巢作りの鴉針金曲げに曲げ

【評】鴉は知能が高い鳥だ。雑食で人間界に住み廃棄物を利用して生きる。子供への愛情も極めて深い。この句は懸命なと言わず「曲げに曲げ」と言った描写が優れている。投げ合いとなりし我が家の年の豆

北九州市 宝満 光保

【評】お子さんが多いのか、賑やかな豆撒き風景。いつしか投げ合いになってしまった。伝統破壊など堅いことは言わないで楽しくやろう。もともとが遊びなのだ。初場所や鮮やか宇良の伝え反り

町田市 枝沢 聖文

【評】しこ名は重苦しいものが多くなった。私は宇良が単純で好き。アツと言わせる技もやる。敵寒の朝練鞍馬湯気けぶる

千葉市 高 久

灰色の艦船轉と牙返る

神奈川県 中島やさか

冬深む父投げ売りし開墾地

青梅市 松野 英昌

雀・ひよ・目白も見ずよ冬異変

大津市 千川 修一

墨付けの糸に力や春立ちぬ

高砂市 宮田 悦子

島影も船も浮かせて冬温し

南あわじ市 魚谷佳代子

日脚伸ぶ病む弟へはがき書く

加茂市 田代 旅子

## 高野ムツ才 選

笹起きる音が山河を自覚めさす

【評】「笹起きる」は積もった雪に耐えていた笹が雪解けで立ち上がるさま。北海道で生まれた季語。その音に大自然もまた眠りから覚める。波滞の車列を縫って初蝶来

東京都 中島 徒雁

【評】なるほど、こんな初蝶もいたか。動けない車という人工物との静動の対比はイロニーに富み、ユーモラス。造物主の力に人間の知恵は所詮及ばない。難云えは薬また増ゆ二月片

宝塚市 羽山 淳子

【評】長寿に感謝しながらも、加齢を実感している心境が、上五の表現に滲み出ている。まだ油断はできないが、今冬も無事乗り切れそう。笹鳴きや絶えて久しき路線バス

南丹市 小西すみ子

炬燵から見上げる空に雲の旅

越谷市 小玉 孝男

湯豆腐の怒りのやうな熱さかな

甲府市 村田 一広

初蝶を見しを手柄のごとく言ふ

八王子市 徳永 松雄

大試験友と語らん出来不出来

京都市 武本 保彦

夫の手がいつしか肩に梅日和

さいたま市 加治美智子

たんぼぼや父母も祖父も絮吹かむ

東京都 東 賢三郎

## 正木ゆう子 選

雪降るや祈りは声を伴はず

【評】何もできないから祈る。言葉にならないから祈る。声が届かないから祈る。思いよ届けと祈る。見えないものを信じて祈る。祈るしかないから祈る。ただただ祈る。いつばいに躑ひりき薄氷

神戸市 藤生不二男

【評】着水したつもりで鴨が、氷の上で滑って慌てているのを見たことがある。彼もきつと躑を一杯に開いて踏ん張っていたにちがいない。牙返る所詮はひとりこれだけ

神奈川県 石原美枝子

【評】孤独を詠んだ投句は多いが、この句は下五が力強い。「これでいい」は魔法の言葉。「これでいい」と言ってみるだけでも多分いい。はうはうと狸暗きは夜半の庭

札幌市 進藤 直樹

大試験終へて食ふのか眠るのか

奈良市 上田 秋霜

あの時のままの間取りや避寒宿

深谷市 酒井 清次

布団針老いて重宝針供養

神戸市 吉野 勝子

外郎は梅見のみやげ白が良き

藤沢市 並木 紀子

旧正を祝ふごつた煮やたら漬

東京都 望月 清彦

見逃しに気付く梅林あと戻り

東京都 松本 武雄

## 小澤 實 選

関東豆撒きて津軽や福は内

【評】関東豆とは落花生のことを言う。節分に大豆では無く、落花生を撒く地方もあるのだ。関東豆という呼び方そのものも懐かしく、旅情を誘う感じがある。春の夜や文庫『タルチュフ』★ひとつ

静岡市 山本 正幸

【評】昔岩波文庫は値段を星印で示していた。星ひとつは一番薄いわけだ。『タルチュフ』はフランスの作家モリエールの戯曲である。新品の消しゴム二つ大試験

高岡市 池田 典恵

【評】新品の消しゴムをふたつも持ってきたところに、この句の登場人物の大試験への意気込みと緊張感が読みとれるわけである。使はれて歯ブラシ疲れ春寒し

川崎市 折戸 洋

春愁やカツカツと鳴るキーボード

横浜市 岡 一夏

セロリ噛む人の貌見ることが好き

山梨県 一瀬 利彦

石段に降りだす雪や実朝忌

京田辺市 加藤 草児

引き近き鴨のせわしき羽音なり

日立市 菊池 三夫

春めきて大道芸のジャグリング

伊勢市 藤田ゆきまち

露味噌をすこし焦がして昼の酒

高山市 直井 照男

## ときめき永久に ④

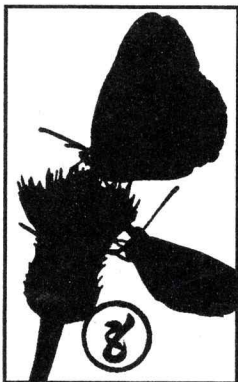
### 俳句あれこれ 池田澄子 (俳人)

毎年「俳句研究」十一月号が特に、俳句は優雅な手遊びではないと私を煽りました。

一九七七年第五回五十句競作の佳作第一席は、ハクレヨンの黄を麦秋のために折るで記憶していた林桂の作で八嫁入りの母のうぬぼれ鏡かなV入夢の祭にサーカスが来て点りけりVなど。新潟の大学生とあった。沢好摩も、やはり大学生の夏石番矢も第二席に載っていた。

その号は「三橋敏雄特集」でもありました。自選二百句の各句に、世の誘いを掻き分けて俳句に立ち向かっている作者の、敬虔な祈りのような厳しさと喜びを感じたのでした。

十七歳の作「少年ありピカソの青のなかに病むVから入夏百夜はだけて白き母の恩V」など。俳句は風流韻事ではないのだと各句が私に囁いた。その人に師事して俳句を究めていきたいと無謀にも決めたあの日々。あのときめきを抱えて今も、ひたすら俳句を書いていきます。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭